

近接領域からの言説に基づく精神分析の転移概念の検討

— D. ショーンと G. ベイトソンの転移理解からの学び —

An Examination of the Concept of Transference in Psychoanalysis Based
on Discourse from Different Disciplines:
The Significant Impact of D. Schön and G. Bateson in Understanding Transference

吉澤 一 弥*

Kazuya YOSHIKAWA

要約 S.フロイトによる転移の発見は、実践科学としての精神分析学の洗練と発展の原動力となった。転移は、患者が過去の重要人物との間で経験した感情や葛藤を、現在において治療者に振り向ける反復強迫のことをいい、逆転移とセットで現代の精神分析学にける主要課題であり続ける。哲学者の D. ショーンは「行為の中の省察」の理論構築の文脈で精神分析を対象にした。そして問題設定と枠組みの転換を図るツールとして転移に着目した。枠組みの転換に続く新たな題材の出現という螺旋循環的な省察過程や仮想世界の実験の考え方は、精神分析療法の解釈過程の検証プロセスの深化と可視化を可能にすると考えられる。文化人類学者の G. ベイトソンは論理階層における学習Ⅱの産物である「染みついた前提」の典型例として転移を挙げ、ダブルバインドの建設的解決の方法として学習Ⅲを論じた。フロイト以来の課題である転移の反復性と陰性治療反応の理解に新たな視点をもたらした。

キーワード：転移, 行為の中の省察, 枠組みの転換, ダブルバインド, 論理階層

Abstract Transference as identified by Freud continues to be a major challenge in modern psychoanalysis. Philosopher D. Schön looked at psychoanalytic therapy in the context of the theoretical composition of "reflection in action." He focused on transference as a tool for specifying problems and changing frameworks. In the reflection spiral, a new topic emerges following a change in framework, and the idea of experimentation in the virtual world allows a deeper and more discernible process of verifying the interpretation process in psychoanalytic therapy. Cultural anthropologist G. Bateson cited transference as a typical example of the "unexamined premise" that is a product of learning II in a logical hierarchy, and he discussed learning III as a method for constructive solution of a double bind. Repeated transference and negative therapeutic responses have been issues in psychoanalysis since Freud, and the current work has brought a new perspective to understanding those issues.

Key words : Transference, Reflection in action, Reframing, Double bind, Logical category

はじめに

ジグムント・フロイトは、人間の行動や症状形成に多大な影響を与える無意識を発見し、精神分析学

を創始した。フロイトの技法論は、パリのジャンネの影響によるメスメリズムに始まり、前額法を経て自由連想法の確立に至るが、この変遷の中でなされた「転移 (transference)」の重要性の認識こそが実践科学としての精神分析学の洗練と発展に寄与したといえる。転移とは、患者が過去の重要人物との関係で経験した情緒や未解決な葛藤を、現在の場面つま

* 人間生活学研究科
Division of Human Development, Graduate School of
Human Life Science

り治療者に対して不釣り合いな感情や態度として表出することをいう。治療者が患者に向ける逆転移を合わせた転移概念はフロイトの時代から100年以上を経た現代に至るまで精神分析学の主要課題であり続けている。

本稿では、まず精神分析学において論議の続いている転移概念の時代的変遷を概観する。その上で、精神分析学や精神医学の近接領域に位置する哲学者のD.ショーンと文化人類学者のG.ベイトソンの転移概念に関する記述や言説を吟味しながら、その新たな理解と解釈の構成の可能性を探求したい。

精神分析学の内部では、治療者ではない立場の者が語る精神分析の技法論に関しては目を向けない習わしがあると思われるが、哲学者のショーンや文化人類学者のベイトソンの場合、精神分析家との交流があり精神分析療法への造詣も深いことから、彼らの語りには耳を傾けるに十分な価値があると筆者は考えた。こうした近接領域の側からの転移概念の検討と言説は、分析家に対して新しい視点や刺激を与える可能性を秘める。

縦割りの研究分野を超えて、多様な視点や刺激を与えあうことの意義は計り知れない。筆者は、近年実践している多職種連携や異分野の専門家との協働プロジェクトの経験から、分野の境介を超えた対話もたらす意義を実感しており、これが「近接領域からの言説に基づく精神分析の転移概念の検討」という本稿の主題に結びついたのである。

フロイトの転移と転移神経症

フロイトは、移転をどの患者にもみられる普遍的な現象と考えた。フロイトが最初に転移を記述したのはドラ症例の論文においてであり¹⁾、「医師という人間と過去に関係した人間とがその転移特有のやり方で取り替えられている。言い換えれば、過去の精神的な体験すべてはけっして過去に属するものではなく、医師という人間との現実的な関係として再活動し始める」とあり、現在に生きる過去という治療技法上も重要な文脈の認識がすでに提示されていることになる。

治療機序に関わるダイナミズムに焦点をあてた場合、転移神経症 (transference neurosis) の発見が技法的に本質的なものとなる。初回のセッションでも患者は転移を向けることは間違いないが、精神分析過程が進んでゆくと、転移を指し示す要素が豊か

に拡充され、次第に転移が組織化される。転移が組織化された場合には、分析医との関係性の中で症状が消長するようになる。つまり転移神経症として治療的に変化を与えることが可能になる。

フロイトが治療機序に深くかかわる意味合いで転移神経症という概念を導入する際に、患者が転移において幼児期の葛藤を反復する傾向を反復強迫と呼んだ。この反復傾向は精神分析の解釈的介入によって一旦解消されても再び出現するために、フロイトは徹底操作 (working through) を必須の技法と位置づけた²⁾。

精神分析療法は、厳格な治療構造の中で行われる。つまり1セッション50分-60分、週に4-5回の頻度、患者をカウチに横たわらせて分析医は背面に座る、自由連想法、料金を決めるなどの外的構造要因と、分析医は患者の連想に対して平等に漂う注意を向け先入観なしに傾聴する、明確化や解釈的介入を遵守する、逆転移に常に注意を向けるなどの治療姿勢の要因である。

フロイトは、患者が治療構造を遵守し、治療が継続するならば患者の神経症を転移神経症に変えることができ、治療的な操作が可能になると考えた。

フロイト以降の後継者達による発展は、転移が病気と健康な生活との間の中間領域として機能すること、そして転移神経症を治療的に操作することが、元の神経症の起源である幼児期神経症を治療的に扱うことと同等であるという認識をもたらした。

クライン学派やその後の転移概念の洗練

メラニー・クラインは、フロイトの精神分析学の精神的発達理論、生と死の本能論、技法としての転移理解に関して、正統的な後継者として位置づけられる。転移について、赤ん坊の最早期において対象関係を決定づけていた過程が反映され、情緒、防衛、対象関係に加えて、現在の状況と最早期の体験の間にある全体状況を考慮する必要性を説いた³⁾。

ドナルド・メルツァー⁴⁾は、転移の収集という積極技法を押しすすめた。分析家との関係について示唆する患者のあらゆる連想素材を集めることにより転移神経症の組織化を目指すものといえよう。メルツァーはとくに夢素材を重視し、患者の日中の生活にも彩り影響を与える無意識的空想を夢素材と同次元で扱い転移理解に拡がりをもたせた。クラインは、投影同一視 (projective identification) の防衛機制を

重視し、患者が転移状況に置いて分析家を操作しようとする際に働く主要ツールであると考えたが、メルツァーはこれを発展させたのである。投影同一視の対象操作性は、分析家と患者の間に頻繁に生じる相互作用と逆転移に再び目を向けさせた。転移と逆転移は連動していて、両者の相互交流の産物という観点を重視する立場、分析家自身の防衛的な転移概念の使用に警鐘を鳴らす立場もある。

ロバート・ラングスは、精神分析療法のスーパーヴィジョンのセッションのやり取りの詳細を検討し、治療構造の治療者による逸脱⁵⁾に起因する非転移的要素を明確化した。治療者が逸脱や不適切な介入を自覚し修正することで、その後の患者からの題材の現われが変化するナラティブの様子を描き出した。

ショーンの行為の中の省察

アメリカの哲学者のドナルド・ショーンは、専門職の知と行為の中の省察 (reflection in action) の議論の中で、その題材に精神分析療法におけるスーパーヴィジョンを取り上げた⁶⁾。ショーンは、ある研修医からのリクエストによりこれを扱うことになったのである。ショーンの議論は、スーパーヴァイザーが枠組みの転換 (reframing) に転移を導入したことを中心に構成されている。転移は研修医が担当する精神分析療法にとって基本的な技法のツールであるが、スーパーヴィジョンにおいても膠着状態を打開する決定的なツールになっている。ショーンは直接の治療場面ではなく、あえて専門職教育の場面であるスーパーヴィジョンを選択した理由について、通常⁷⁾の精神分析療法の場面よりもスーパーヴィジョンの場面の方が、行為の中の省察がより鮮明に表れるからとした。

ショーンの当時のアメリカは、精神分析学の盛隆期でありハリウッドスターなどの著名人が精神分析をステータスシンボルのように受けていた時代であり、精神分析や心理療法のいくつもの流派が百花繚乱の様相を呈していた。こうした状況において、どの立場や流派であっても、患者一人ひとりを唯一固有のケースとして見なすことで違いを乗り越えられたとした。

同じ時代のアメリカで活動したショーンは、自我心理学の流れを汲むエリク・エリクソンと交流があったようで、もっぱらエリクソンの精神分析の考えに準拠している。

エリクソンはそれぞれのケースが固有の宇宙であり、固有の探究領野であるとし、患者を標準的な診断カテゴリーの一例として扱う治療とは一線を画した。行為の中の省察という観点から見ても、固有の宇宙であり固有の探究領野であるという考えは合致する。つまり患者固有の問題を把握し、行動についての解釈を組み立て検証し、治療的介入をデザインするという視点は学派や流儀を超えて一般性をもつからである。

分析家の解釈は、患者が自分の感情とイメージを一層共有しやすい形で言語化することを促す効果や、分析家自身がそれに対してもつ印象を伝えることにもなるとショーンは考えた。解釈の妥当性は、患者がその解釈にその場で同意することで確認されるには限らない。むしろ解釈によって患者と治療者との対話がさらに展開し、予期しえなかったような新しい洞察につながることで、解釈的の確さが確認されるとした。ショーンは転移の定義をエリクソンの思考に準拠して、患者は過去を現在の中で反復することに囚われがあること、患者自身のメッセージを人生の他の状況から治療状況へ転移させる傾向があること、逆転移から自由である分析者の解釈が患者の囚われを解き放つ効果を強調した。

枠組みの転換を促すツールとしての転移

ショーンが挙げたスーパーヴィジョンの事例を紹介する。研修医は治療を進めるにあたって苦境に陥っているセッションの題材を自身の問題の設定と共に提示した。スーパーヴァイザーは研修医が苦境に陥っているのは問題の枠組みの作り方のまずさによると評価し、転移概念を導入することで、枠組みの転換を図った。ここでスーパーヴァイザーは、固有で不確実な状況との省察的な対話のプロセスに携わっているとショーンは指摘する。

研修医は、女性患者の「患者とボーイフレンドとの間の行き詰まった関係」を、「患者と研修医自身との行き詰まった関係に関連づけて見る」、つまり転移として理解した。治療中とそれ以外の患者の生活の経験のふたつの流れを繋ぐことで、転移状況を患者の生活の縮図として見る事ができたのである。

枠組みの転換は、状況に新しい意味を与えるだけではなく、予期せぬ変化をもたらすこともあるとショーンはいう。研修医は新しい過去の題材を物語り、実践者はそれに耳を傾けながら、再び状況の枠

組みを転換する。スーパーヴァイザーは患者が語る物語の中に、「欲求阻止状態のままに置かれている」パターンを見出し、さらに深い探究へと導く説明を研修医から聴き取り問題の再構成を図るという循環が生じている。つまり行為の中の省察と呼ばれる新しい発見が生み出され続けた。ショーンは行為の中の省察のプロセスは、評価、行為、そして再評価の各段階を螺旋状に進むと考えた。スーパーヴァイザーは研修医の報告を通して患者を診断し治療状況を見る。新しい物語を顕在化させ、それを厳密に探究し、理解が進んでいることを確認し、同時に経験を修正する新しい現象を描き出す。このようなスーパーヴァイザーの手立ては、予期せぬ気づきを生み出した。スーパーヴァイザーは研修医から「患者とボーイフレンドとの諍いに関する、驚くべき複雑な話」を引き出し、「患者の消極性と他者依存」の兆候を読み取ったのである。

生成的メタファーと見なすこと

ショーンは、生成的メタファーというアイデアを提示している。ある新しい問題がすでに解決されている問題と類似しているように見える場合、それをモデルとして参照するやり方のことをいう。これは問題の類似性を省察するという意味であり、当初類似しているように見えたふたつのものが、実際にはかなり異なっており、一般的には異なる領域の経験と考えられているものに陥った場合には、「見なす」ことにより解決を模索するのである。これは生成的メタファーの形式をとることになり、ここでの見なすことの役割は、転移とも関係して問題の探究や新たな解釈のデザイン策定する上でも重要である。

スーパーヴァイザーは直接患者に話しかけたり関わることは無い。あくまで研修医とのやりとりを通して治療者と患者との経験に基づいた世界を表現する談話について仮想世界を組み立てるとショーンは述べた。スーパーヴァイザーは選択的な質問を研修医に投げかけながら解釈的探究に向かう。仮想であるために試行錯誤が可能になることも解釈の構成に有利に働くわけである。

ベイトソンの論理階層理論

文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンは、精神科病棟で統合失調症の家族のコミュニケーションの歪みに関する研究を行い、ダブルバインド構造を見

出した。ダブルバインドとは、相反するメッセージを受け取った場合にフリーズしてしまう現象のことで、永続的に晒され続けることで統合失調症を引き起こすと考えた。一方で、ダブルバインド状況に直面したときに、建設的な解決策を考え出す可能性についても指摘し、その体系をコミュニケーションや学習における論理階層 (logical category) と呼んだ。

ベイトソンは、提唱する学習Ⅰ～Ⅲの階層モデルとして、物理学の運動の法則を示した。ゼロ学習 (定位置)、学習Ⅰ (一定の速度)、学習Ⅱ (速度の変化を示す加速度)、学習Ⅲ (加速度の変化率) である。ゼロ学習の特徴は、常に一定の反応を示すような限定性で、試行錯誤は一切反映されない。学習Ⅰとは、一つの選択肢群の中からの選択の誤りを訂正することによる、反応の限定性 (ゼロ学習) の変化である。つまり試行錯誤的経験が生かされる。学習Ⅱとは、学習Ⅰの進行上のプロセスの変化であり、一連の選択肢群の中で選択が修正される変化、あるいは経験の連続体をどう区切るかのしかたの変化である。学習Ⅲとは、学習Ⅱの進行プロセス上の変化である。すなわち代替可能な選択肢のセットから成るシステムの中で選択が修正される変化であり、このレベルの変化を強いられる人間や哺乳動物は、時として病的な症状を来すとした。

人間の性格や癖やある種の処世術という固定した特性は、学習Ⅱの産物であり個体発生的なつまり幼少期からの環境との相互作用にルーツをもつ。ベイトソンは、変化を起こしにくいこれらの組織化された特性を「染みついた前提 (unexamined premise)」と呼んだ。

染みついた前提としての転移

ベイトソンは、精神療法の場で学習Ⅱがもっとも顕著に見てとれるのが、転移の現象であると考えた。患者は治療者に対して必ず不当な思いを携えてやってくる。患者は、自分にとっての親などの重要な他者が過去に自分を扱ったのと同じ扱い方で自分に接するよう、セラピストに意識的・無意識的に迫るような言動をとる。これは、患者が治療者とのやりとりを、過去の学習Ⅱにまつわる諸前提にしたがって創り上げることを意味する。

ベイトソンは、さらに転移のパターンを決定する学習Ⅱの起源が早期幼児期に遡り、かつ無意識的で

あることを指摘した。つまり各自の染みついた前提には個体発生的な歴史と積み重ねからくる慣性があることになる。

また学習Ⅱにおいて習得されるのは、連続する事象の流れを区切ってまとめる、切り取り方であるとした。この切り取り方は、ロールシャッハ・テストのインクプロットの知覚実験でインクのしみに対して人それぞれ見え方が異なるのと同様であり、またインクプロットには、正しさも誤りもないただの見え方であることを強調したのである。

学習Ⅱの産物である染みついた前提の例として、ベイトソンは転移を挙げた。患者は、転移状況で自分の親などの重要な他者が過去に自分を扱ったように自分に接するよう、治療者に迫る多くは無意識的な言動や態度をとる、つまり患者は治療者とのやりとりを、過去の学習Ⅱにまつわる諸前提の通りに構成しようとするのである。患者は治療という新しい状況の中で、プラスの強化を引き出そうとして手練手管に走り、自分の期待する型に治療全体が収まるように行動する。それは、患者の前提と治療者の前提との衝突の形で現れる。治療者の前提とは転移解釈といった介入や制御された逆転移が含まれる。

ベイトソンは、染みついた前提を引き出して問い直し、変革を迫るのが学習Ⅲでありその方策を挙げた。例えば、学習Ⅱのカテゴリーに入る習慣形成を、よりスムーズに進行させる能力や構えの獲得である。それとは逆に学習Ⅱの発生を抑えたり、これら双方向を自分で操ったりする術の習得もある。学習Ⅱを増大させる方向にも、減少させる方向にも働くという点で流動性や柔軟性が重視され、これによって囚われからの解放が可能になるとした。

考察

1. ショーンの「行為の中の省察」と転移理解

ショーンは、精神分析家などの専門職の実践の認識論つまり「行為の中の省察」の進展によりその存在意義が高まり、精神分析家が治療で直面するさまざまな問題設定や解釈的介入の構成の基となる「知の生成」が安定的で確固たるものになる方向性を示したといえる。それは、分析家がすでに確立している理論や技術のカテゴリーに頼るのではなく、行為の中の省察を通して、独自の事例についての新しい理論を構築するという形態である。

ショーンは、実践者は考えることと行動とを分離

せず、決断の方法を推論し、後でその決断を行為へと変換すると述べ、精神分析のセッション中の探求と介入行為に関して、探究の最中に介入行為へと踏み出すという同時性に着目した。臨床につきまとう不確かで独自の状況であっても思索が進行し継続することの重要性と、実践の中に省察をおこなう機会を各自が創り出す技の大切さを強調している。

前述のようにショーンは、「行為の中の省察」の理論構成の文脈で精神分析療法を対象にしたが、それも直接の治療場面ではなく、あえて専門職教育の場面であるスーパーヴィジョンを選択した。その選択理由について、通常精神分析療法の場面よりもスーパーヴィジョンの場面の方が、行為の中の省察がより鮮明に表れるからであるという認識は、臨床におけるスーパーヴィジョンの有用性をより高める。

ショーンの考えをセッションにおける患者の自由連想と分析家の探求に当てはめると、精神分析の実践は、当初の曖昧な場面から省察的対話が進み、解釈的介入に結びつくような創造性と即興の螺旋状の連鎖といえるのではない。

ショーンの精神分析の知識がエリクソンの考えに沿っていることは、一時期同じ地域で活動したり、講演にエリクソンを招聘していること、著書の参考文献にある精神分析家はエリクソンにほぼ限定されていることから窺い知ることができる。転移概念に関してもエリクソンの定義をそのまま踏襲している。スーパーヴィジョンの例では、問題の設定と枠組みの転換のツールとして転移概念に着目した。研修医が持ち込んだ問題の設定を新しい水準で枠組みの転換を行い、研修医が転移により注目するように導いている。スーパーヴァイザーの研修医へのいくつかの質問は、患者の潜在的な課題を表面化させ、病理構造の明確化と解釈の構成につながった。

スーパーヴィジョンという行為の中の省察が進展するにつれ、研修医が提示する題材も拡がりを見せ新たな物語を呼び起こしているが、こうした展開はメルツァーが指摘している転移を積極的に収集するアプローチを彷彿させる。そのメカニズムの原動力をショーンが行為の中の省察として論じたことであり、分析家がセッション中に生み出す解釈の発見や創造の理解に役立つと考えられる。

また解釈の妥当性に関して、ショーンの螺旋状の循環モデルについて述べている。実践者は、状況の枠組みを転換させた結果を見極めるために、転換し

た枠組みを状況にあてはめて吟味する。実践者はこの当てはめを、手立てを講じ、結果を見出し、意味づけ、評価し、さらに手立てを講じるという行為の組み合わせを通じておこなう。さらに講じた手立てを組み合わせる中で、現象を理解し、問題を解決し、仮想実験の機会を利用する。仮想世界における解釈仮説の生成と試行錯誤的実験の有用性は多大で、患者には直接接しないスーパーバイザーが直接の経験をする代わりとなる。講じた手立ては、状況に新しい意味を与えるだけでなく、予期せぬ変化をもたらすこともあり、その場合研修医は過去の新しい物語りを持ち出し、スーパーヴァイザーはそれに耳を傾け、ふたたび状況の枠組みを転換するという省察的対話の循環が永続することになる。

その基盤にあるのが、スーパーヴァイザーのような経験豊富で専門的実践者の技 (artistry) である。ショーンは、この技が種類の異なる膨大な情報を選別管理し、ひらめきと推論の長い道筋を紡ぎ、探求の流れを中断することなしに同時に複数のものの見方を保つことを可能にする旨を指摘している。

ラングスは、グループスーパーヴィジョンにおいて、実践者により提示されるナラティブ構造に着目し、実践者が行った解釈的介入の妥当性の評価に関して、後に引き起こされる患者の連想の流れや内容を相互的な転移として精査することを、検証プロセス (validating process) と呼んだ。ラングスがここで着目しているのは、分析家による治療の準拠枠からの逸脱である。逸脱があると本来の精神分析的探究が阻害され、それを示唆し修正を求めるメッセージをもった題材が繰り返される現象が現れる。これをスーパーヴァイザーが察知して、指摘するという手順を示している。このプロセスはショーンの状況との対話と省察の循環に相当すると考えられる。このようにつまりショーンの概念は、精神分析の解釈の構成だけでなく検証にも応用できる汎用性を有すると考えられる。

2. ベイトソンの「染みついた前提」としての転移

ベイトソンは精神分析学者のジャーゲン・ロイシュと組んでコミュニケーションに関する著書を出版したり、精神病棟に勤務して統合失調症の家族のコミュニケーション研究を行ってダブルバインド理

論を発展させ、またエリクソンの文献を引用したりしていることから精神分析学や精神医学との交流があり造詣が深いことがわかる。

ベイトソンは論理階層における学習Ⅱの産物である「染みついた前提」の例として精神分析学の転移概念を取りあげた。またダブルバインドの建設的解決である学習Ⅲの具体的な方策の例としても転移を題材にしている。こうした方策をヒントにすることで、フロイトのいう徹底操作の意味合いを再考するきっかけが生まれる可能性があると考えられる。

ベイトソンは、学習Ⅱのカテゴリーに入る習慣形成を変化させる動因について、よりスムーズに進行させる能力や逆に抑制する動きの技術の習得により柔軟性を増大させることが重要であるとしたが、これもフロイト以来の課題である転移の反復強迫性と陰性治療反応の理解と解決の方策に向けて、新たな視点をもたらしたといえる。

このように染みついた前提としての転移・逆転移の認識と流動性の発展は、ベイトソンの論理階層の水準移行という画期的な視点の導入によりもたらされた。これは、転移解釈の重層的な探索に貢献し、転移技法の新たな論議への刺激になると思われる。

参考・引用文献

1. Freud, S: *Three Essays on the Theory of Sexuality* : Standard Edition, Hogarth Press, London (1905)
2. Freud, S : *Remembering, Repeating and working-through (Further Recommendation on the technique of Psychoanalysis, II)* Standard Edition, Hogarth Press, London (1914)
3. Klein, Melanie : *Narrative of a Child Analysis*, The Writings of Melanie Klein, Volume 4 :Williams & Wilkins (1962)
4. Meltzer, D : *The Psycho-Analytical Process* : karnac, London (1967)
5. Langs, R: *The listening process*, New York : J. Aronson (1978)
6. Schön, D : *The Reflective Practitioner -How Professionals Think in Action*, Temple Smith London (1983)
7. Bateson, G : *Steps to an ecology of mind.*, University of Chicago Press, Chicago (1972)